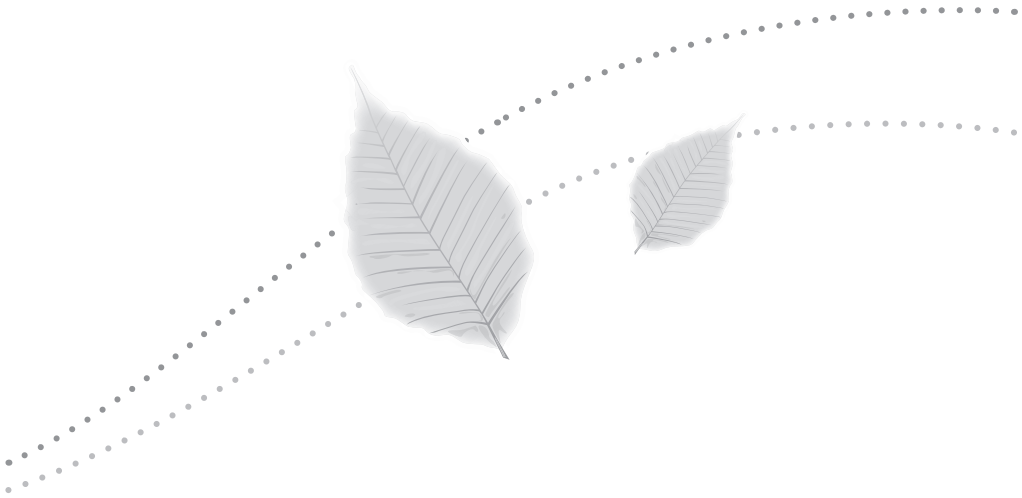
巻頭エッセイ

伝わることば

今泉　清保



先日、こんな仕事をした。ある省庁が実施する全国的な調査のやり方を、全国の担当職員に教えるためのＤＶＤで、私はそのやり方を伝える役。モニター画面に出る原稿を、カメラに向かって読むのが仕事だ。

撮影の前、担当ディレクターに「一言一句、言葉を変えずに読んでください」と言われて愕然とした。

難しい言葉が並んでいて、中には辞書に載っていない言葉もあった。辞書に載っていない言葉なんて使っていいのかと思うが、いわゆる「お役所言葉」だからいいらしい。とにかく、何人もが内容をチェックして出来上がった原稿なので、一切変更はできないということだった。仕事の内容をよく聞かないまま引き受けてしまったことを後悔した。こういう仕事がいちばん苦痛なのだ。

一般的にアナウンサーは、原稿を読むのが仕事だと思われている。でも私たちは、原稿をただそのまま読んでいるだけではない。例えばニュースであれば、一体何がニュースなのか、内容を理解していなければ、ちゃんと伝わるようには読めない。新人アナが読むニュースはとても聞きづらいが、あれは技術の未熟さに加えて、文字を追うのに精一杯で内容が理解できていないからだ。

冒頭の仕事の何が苦痛かというと、自分が理解していない文章を読まなければならないこと。そ

いまいずみ　せいほ　国立国会図書館職員、福岡放送アナウンサーを経てフリー。テレビ東京「レディス４」司会。これまでの出演番組は「はなまるマーケット」「スーパーモーニング」など多数。

して、読まれることを前提にして書かれていない文章を、無理やり声に出して読まなければならないこと。役所の人が作った原稿は、誰も声を出して読んでみないまま出来上がったものだというのが明らかだった。三百字ぐらいあるのに、マルは最後に一つだけ、なんていう文章ばかりだったが、そんな言葉はとても読みづらいし聞きづらい。とにかく私なりに、おそらく大事であろうところをゆっくり読んだりして、なんとか仕事を終えたが、残念ながらＤＶＤを見る人には伝わらないだろう。伝える役の私がよくわかっていないんだから。

原稿を理解していないと伝わらない、というのは本当だ。以前こんなことがあった。

医療保険のＣＭの依頼がきた。テレビ番組のように見えるＣＭで「インフォマーシャル」と呼ばれるもの。２回目までは女性のアナウンサーが一人でやっていたが、次回からはもう一人男性を加えたいということだった。

収録に行ってみて事情がわかった。保険のＣＭの表現には制限があり、社内の厳しい考査を経て出来上がった原稿は、やはり「一言一句変えてはいけない」ものだった。女性アナが一人で読むのが大変だったので、二人でやりましょう、ということになったようだ。これは私にとっては苦痛ではなかった。当時担当していた番組で、何度も保険について取材し、生放送で説明をしていたので、保険についてかなり知識がついていたのだ。原稿の内容も理解できたし、読みにくい文章は、内容を一切変えずに言葉を変えて「この方が伝わりやすいと思いますが」とスポンサーに提案して変えてもらったりした。

後日プロデューサーに「問い合わせの電話が、それまでより百件以上も増えたんですよ」と言われて驚いた。これはもちろん私に人気があって増えたのではなく、意味がわからないまま原稿を読んでいた女性アナよりも、内容を理解して読んだ私の方が聞いてわかりやすかったから、以前よりも多くの人に伝わったということだろう。

同様に、自分はそうは思っていないのに、原稿や台本に書いてあるからとそのまま言うと、やはり伝わらない。そう思っているように聞こえないし、言葉が薄っぺらくなる。格好つけて、使い慣れていない言葉を使ったときも伝わらない。若いアナウンサーがニュースの内容についてコメントしても説得力が無いのはそのせいだ。「知ったふり」「わかったふり」は通用しない。自分が、自分の頭で考え、わかったことしか伝わらないのだ。

毎日、生放送の前に考える。きょう、いちばん伝えたいことは何だろう。そして、その伝えたいことは、どう言ったら見ている人に伝わるだろう。私は、何かが伝えたくてこの仕事をしている。だからいつも、伝わる言葉を必死に探している。